

## ■第59回企画展

## 北の黒船

会期 平成20年3月15日(土)～平成20年5月11日(日) 会場 特別展示室

寛政4年(1792)、ロシアのラクスマンが蝦夷地(現在の北海道)に来航し、幕府は北の守りを重視するようになります。そして、ロシア船の来航に備えるため、蝦夷地を幕府直轄とし、盛岡藩と弘前藩にその警備を命じました。

その功績により、今から200年前の文化5年(1808)、盛岡藩は10万石から20万石に加増されます。20万石の石高は、となりの秋田藩と並び、東北では仙台・会津に次ぐものです。しかし、実際には領土が増えたわけではありませんでした。名目のみの加増は、格式上昇に伴う支出増加を招き、藩財政を圧迫することになっていきます。

本展は、盛岡藩を中心とする蝦夷地警備の様子を絵図や勤番日誌などによって紹介します。また、相馬大作事件に代表される南部と津軽の確執、沿岸警備、北方世界への関心を物語るおよそ130点の資料を出品します。蝦夷地警備の実態とその影響について考え、北海道と岩手の歴史的つながりを認識する機会としていただければ幸いです。

## 1 蝦夷地の形

下北半島の北端・大間崎から函館まで、直線距離で18kmたらず。津軽海峡を越えた往来が古くから行われていたことは、縄

文時代の遺物からも知られています。しかし、蝦夷地のほぼ正確な形を人々が知るのは、江戸時代後期になってからでした。

天明6年(1786)に出版された林子平の『三国通覧図説』は、日本に隣接する朝鮮・琉球・蝦夷の地理や習俗を紹介したものです。このことは、蝦夷地が朝鮮・琉球と同じ外国と認識されていたことを示します。

今回の展示では、江戸時代の世界地図や日本地図で蝦夷地が外国と位置づけられ、ラクスマン来航以後、人々が蝦夷地に関心を高めるにつれて蝦夷地図も正確さを増していったことを紹介します。

## 2 北海の動揺

蝦夷地はアイヌの人々が暮らす世界でした。しかし、江戸後期に蝦夷地で獲れる鯨などの骨が肥料として求められ、日本人が盛んに訪れるようになります。やがて日本人が経営する漁場も現われ、交易や雇用条件をめぐるアイヌの人々が反感を持つようになります。

寛政元年(1789)、クナシリのアイヌが漁場を運営する日本人を殺害。道東の標津地方にも暴動が広がり、合計71人の日本人が殺されました。蝦夷地を管理する松前藩は暴動を鎮圧しましたが、幕府は、松前藩の政策に不信感を抱きます。そして、多くのロシア船が来航し、習俗をロシア

化させたアイヌもいることを知った幕府は、寛政11年(1799)に東蝦夷地を幕領化することを決めます。各交易拠点には幕府の役人が配置し、その警備を盛岡・弘前藩に命じたのです。さらに文化4年(1807)には全蝦夷地を幕領化し、仙台・会津など他の東北諸藩も出兵することになりました。

クナシリのアイヌ蜂起で援軍派遣の準備をする盛岡藩の記録や、通商を求めて来航したラクスマン一行を描いた絵、盛岡藩士が駐屯した陣屋図などを紹介します。

## 3 文化露寇

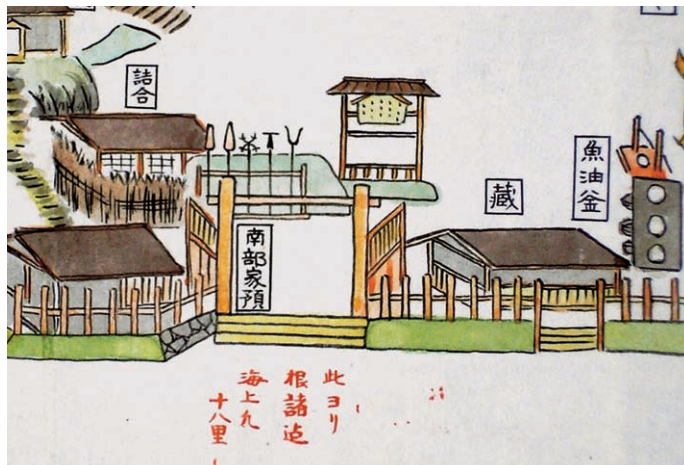
文化4年(1807)4月29日、エトロフ島に20数名のロシア人が発砲しながら上陸。応戦した盛岡藩士大村治五平は、負傷してロシア人に捕えられてしまいます。

約1ヶ月をロシア船で過ごした治五平は、解放後に藩から蟄居処罰を受けました。戦わずに逃げた武士も多いなか、自分の行動は恥ずべきものではないという思いから、治五平は『私残記』という自伝を子孫に残しました。

『私残記』をはじめ大村家に伝えられた資料や、ロシアに報復するため、クナシリでゴロウニンを捕縛した様子を記録した盛岡藩士の勤番日誌などを展示します。



「ラクスマン一行の図」(青森県立郷土館蔵)

クナシリ会所の正門  
「盛岡藩蝦夷地陣屋図」(岩手県立図書館蔵)部分

#### 4 南部と津軽の高直し

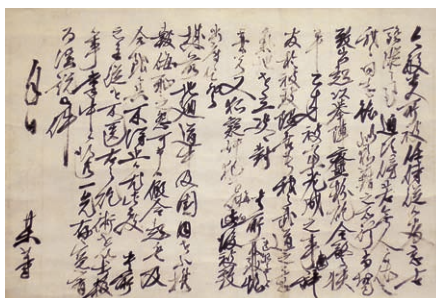
文化5年(1808)12月18日、幕府は10万石の盛岡藩を20万石に、7万石の弘前藩を10万石に、それぞれ石高を改めます。すると両藩は、大藩にふさわしい体面を整えようとします。弘前藩は弘前城天守閣を文化7年に建て、盛岡藩は津志田に遊郭を建てて城下の遊女を一掃しようとした。

盛岡藩と弘前藩は仲が悪く、その評判は幕府上層部も知っていました。蝦夷地警備にあたり、藩士の間でトラブルが起きないよう特に注意を与えるほどだったのです。この不仲は、戦国時代に南部氏の家臣だった津軽氏が領土を奪って独立したという、すでに200年以上も前の、真偽のほどもはっきりしない理由がもてました。

文政3年(1820)、盛岡藩主南部利敬が死去します。跡を継いだ利用は14歳。将軍との謁見が済んでいないので無位無官です。一方、弘前藩主津軽寧親は従四位下侍で、無位無官の南部利用よりも格上になります。“家臣筋の津軽が、南部より格上



「津軽寧親絵像」(弘前市立博物館蔵)



相馬大作筆「津軽寧親あて隠居勧告文」  
(二戸市立二戸歴史民俗資料館蔵)

とはけしからん”盛岡藩士の一部にこんな不満の声が上ったのでした。

現在の二戸市で地域の若者に武芸を教えていた盛岡藩士の二男相馬大作は、津軽寧親を隠居させて、津軽が南部より上位になっている事態を解消しようとします。そして、大作らは参勤交代で弘前に帰る途中の寧親を襲い、隠居勧告に応じなければ鉄砲で射殺しようと計画をたてました。

計画は事前に洩れ、大作は潜伏先の江戸で捕えられ処刑されます。この事件は江戸で評判となり、その後も講談や演劇などで取り上げられることとなります。

#### 5 沿岸警備

ロシア船来航は蝦夷地だけではなく、海岸線を持つ諸藩にも脅威でした。幕府は異国船への警戒を強め、軍備の増強を図るように指示します。盛岡藩は蝦夷地出兵の拠点として大畑(青森県むつ市)に陣屋を整備し、沿岸各地に砲台を築いていきます。

砲台には鉄や青銅で造られた大砲ばかりではなく、木製の「木砲」も配備されたことが絵図や藩の記録から確認できます。本展では、沿岸の砲台に置かれたものでは



「木砲」(八島孝男氏蔵)



「大畑陣屋絵図」(当館蔵)

ありませんが、戊辰戦争で仙台藩が用いた木砲を展示します。

#### 6 安政の蝦夷地領

文政4年(1821)、ロシア船来航も減り、松前藩の復帰運動も強かったことから、幕府は蝦夷地を松前藩の管理に戻しました。盛岡藩と弘前藩は長い蝦夷地警備から解放されることになったのです。

しかし、嘉永6年(1853)にアメリカのペリーが来航し、翌年日米和親条約が結ばれると、伊豆の下田とともに箱館(今の函館)が開港されることとなります。幕府は安政2年(1855)再び蝦夷地を幕領化し東北諸藩に出兵を命じますが、各藩の負担に配慮して警備地の一部の領有を認めました。

盛岡藩は箱館から室蘭までの噴火湾沿岸を受け持ち、室蘭と長万部の周辺を領地とし、箱館・砂原・長万部・室蘭に陣屋を築きました。また仙台藩は、のちに家老となる三好監物が中心となり、白老に広大な陣屋を築いて蝦夷地領の経営に取り組んでいきます。藤沢町黄海を本領とする三好監物の自画像や甲冑なども紹介します。

#### 7 蝦夷地勤番の日誌

蝦夷地に派遣された藩士の多くは下級の足軽たちでした。彼らが厳しい自然と戦いながら、どのような日々を送っていたのか、前沢より派遣された足軽の日記などから垣間見たいと思います。

(主任専門学芸調査員 時田 里志)



盛岡藩モロラン陣屋跡出土「砲弾」  
(室蘭市民俗資料館蔵)